講演一

鞠智城の創設について

講演者紹介
小田　富士雄（おだ　ふじお）
九州大学文学部文学部史学科、同大大学院卒業。九州大学助手、別府大学助教授、北九州市考古博物館館長を経て、福岡大学教授。日本考古学協会委員、九州古文化研究会代表、九州考古学会長などを歴任。現在、福岡大学名誉教授、大宰府史跡調査研究指導委員会委員長。専門は考古学。文学博士。

・講演一　「鞠智城の創設について」

小田富士雄（福岡大学名誉教授）

皆さん、こんにちは。只今ご紹介いただきました小田です。私は専門が歴史考古学の方でございます。歴史考古学と申しますと文献史料だとか美術史の資料だとか、それから考古学の発掘調査で出てきた成果、そういうようなものを合わせてその時代の歴史というのを考えようという立場になってまいります。私の本日の資料は資料篇二七頁から四二頁までです。図面類を多くつけておきましたが、話の順序としては二七頁の方に、鞠智城の出現の背景、それから二番目に鞠智城の構造ということです。三番目に大宰府との比較というものを挙げておきました。そのうち二番目の鞠智城の構造につきましてa、b、c、dと四つあげておりますが、a、bは先ほど矢野さんの方から調査の成果について新たな話がございましたがまだ大宰府とか大野城、基肄城との辺りのことについての比較というものがまだ充分に出来ておりませんので、本日はa、bは時間の関係もございますので省略して、c、d、城門の関係、瓦の関係、その辺りに話を絞りたいと思っております。そして附図でございますが、これにつきましては資料篇二七頁の下に二から、ここの二、三、四、それから一六というのは二八・二九頁の左右の方に②、③とつけておりますが、これが附図の番号でございます。これに二六を加えますと全体のページ番号になるのであります。

一、鞠智城出現の背景

その中でまず鞠智城がいつ出来たのかという問題ですが、これにつきましてはいろいろございまして、先ほどもお話がありましたように鞠智城はいつ出来たか。いつ築城に取り掛かったという記録がないわけでして、出来上がってから大野城、基肄城と一緒に修理をしたという記録が最初に出ています。六九八年に出てまいります。そういうところから多分、大野城、基肄城、鞠智城は同じ時に出来たのではないか、さらに進めて二八頁の資料を見ていただきますとこの中で六六五年に大野城、基肄城が出来たという記録がございますのでたぶんこの頃一緒に出来たが、鞠智城の方は洩れたのではないかというようなことを言われて、大野城、基肄城とほぼ同じ時期だと言われる方もおられます。そこで私の方では、後でまた門の構造とか瓦とも引っかかってくるわけですが、まず最初に一番目の鞠智城出現の背景というところで a 西日本防衛体制の整備というのはこの二八頁に掲げております山城築城記録の順序がこの推移にあたるのでして、さらにこの鞠智城を含めてこういうものが出来てくる順序について考えてみたいのです。その場合に b の東アジア情勢の転換というような話が引っ掛かってきますが、これは石井先生のところと重複しますので今回は省略いたします。結局この鞠智城の築城年代を二八頁の記録類と併せて見ようとしますと、どうしてもその当時の東アジアの背景というものが関わってくるところで、それで東アジアの情勢まで睨みながら進めないとこの辺の年代を決めるのが難しいことになります。結論から申しますと、これから話をする中で私

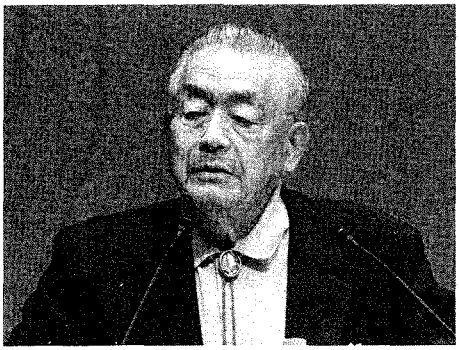

写真 11　小田富士雄氏

の方で推定したのは六六七年に鞠智城の築城がはじまるのではないかということでございます。そこでその推定をするに至った論拠について申し上げておきます。

西日本防衛体制の推移

一つは、まず最初に対馬、壱岐、筑紫などに防人と烽（とぶひ）を置く、という記述がございます。これは私もこれまで何となく防、すなわち兵隊という意味と考えていたのですがその後古代史の方でもいろいろ指摘がございまして、特に亡くなられました北条秀樹さんがこれについて詳しい解説をされました。防と防人、これはどちらも『日本書紀』では「さきもり」と読ませておるのですが、防と防人は違うということ。これは北条さんが典拠にされたのは「軍防令（ぐんぼうりょう）」に出てくるのですね。軍防令の中で防と防人は区別されておりまして、それによりますとこの場合の防と烽というのは防人を配置する施設、それから烽のための施設をいうのであってまだこの中には人は含めていないというのが結論であります。そうしますと実際に六六四年の記事の時には兵隊としての防人はまだ置かれていないということになってまいります。次に、それから常識で考えますと北の方から攻めてこられますので、まず一番に国防の最前線は対馬の金田城です。そうすると金田城が近畿の入り口にあります高安城、それから瀬戸内の中にあります屋嶋城、それらと並んで六六七年に出てくる。なんで金田城が遅れて出てくるのかというのがまず疑問の出発点であります。さらに、それよりさかのぼって六六五年に大野城、基肄城、それから長門城などが出てくるのですが、この時にどうして金田城が出てこないのか、どうして遅れて出てくるのかということです。この辺の問題になりますと、その背景にある東アジアの情勢というものを考えないとそのあたりの謎が解けないところです。これは実はこの後の石井先

生のところで触れられるのかなあと思って実は資料を外したのですが、この六六四年にまず対馬、壱岐にこの防人の施設を設けたとか、筑紫の国に造った。それから同じ年に水城を造ったという記事がまず最初に出てまいります。これは同じ年に既に百済を平定して百済に駐在していた中国唐の将軍が、これは後々まで出てくる人物で郭務悰という人ですが、その後も郭務悰という人物を派遣してまいります。室町時代に出来た『善隣国宝記』という書物がございますが、その中に『海外国記』という書物があったらしくて、それを引用してこの時の様子が細かく出てきます。これは当時の原文なども入っているようですから、この『海外国記』という本はかなり信用していいのだろうと思いますが、その中にその辺の詳しいいきさつが出てくるのですね。また、翌年に郭務悰などが今度は唐の皇帝の書を持ってやって来ます。その時は日本側でもこれは正式の国使として認めて都まで行っております。そういういきさつがありますので、壱岐、対馬に防人や烽を置く、それから水城を造るというその段階である程度平和が回復しました。これはもう攻めて来ることはまずないだろということが日本側にわかってきたわけですね。それでこれまで緊急に国防体制を敷かなくてはいけないという状況だったところが、今度はもう少し余裕を持った西日本全体についての計画的な国防体制を作ろうというような方向に転換していくのです。すなわち六六五年に大野城や基肄城を造る。それからさらに六六七年に高安城、屋嶋城、それから金田城を造る、とこういう順序になって出てきたのです。だからこの段階でまず大宰府の都城制を造るという政策が出てまいります。これは私たちの先生の時代から言われておるように、第一次の防衛網です。大宰府が第一次の防衛網だという言い方をされているところですが、まず大宰府に都城制を敷いて防衛するところからはじめる。それから次の六六七年になりますと第2次の防衛網といわれております、最前線の金田城を造る。それから瀬戸内を東に行って長門城、屋嶋城、高安城と

近畿に至るという計画が第二次防衛網としてあがってくる。

文献史料にみる鞠智城の築城

そうなりますとその後さらに時期は下がりますが六七〇年のところを見ますと、これは六六五年の記事が重出したのだという説もあるところですが、その中に長門に城一つと筑紫に城二つを築城したという記事が出てまいります。これは六六五年の重出記事だというようにもいわれるのですが、重出であってもこれと同じ事を書いておるとすれば六六五年の段階で鞠智城を落としたということはまずありえないということになります。この重出記事というものをそういう考え方ができるのであれば、これは六六五年よりは鞠智城を少し落として考えねばならないでしょう。そうして今言った第二次防衛網というものが前線部で金田城、さらに後背部として鞠智城が必要となってくるわけで、その第二次防衛網の中で前線と後背部という考え方の中に、金田城と鞠智城が出てくるのが妥当ではないかというように考えた次第であります。そういうところから結論を申しますと、六六七年より後に鞠智城が出てくるということはまず無いであろうと。そうすると、これは百済の扶余の都の場合でもまず大宰府に相当するような宮城を守護する泗沘城（しひじょう）という都城が出来て、北に扶蘇山城という山城がありますね。そして東から南にぐるりと回る羅城ができますけれども、さらにその外に外郭として取り巻く山城が出てきます。多分、それに相当するものが金田城と鞠智城であろうというように考えたところです。さらに東に行って近畿の入り口まで要所要所に山城を造るという、そういう考え方になったのではないかということです。そして大宰府の都城制についてはこの第二次防衛網でほぼ終わっているのですからこの段階で鞠智城を想定しておけばいいのではないかというように考えたのであります。

次に何が問題になるかというと一体これら山城を造るのにどのくらいの期間がかかるのかという問題ですね。これにつきましては例えば高安城の場合が六六七年に高安城を築くという記事が出てまいりますが、次の六六九年のところを見ますと天智天皇が高安城に登った。ここで修理のことを議ったというのが出てまいりますから多分この頃には高安城はほぼ出来ているのだろうと考えられます。そうしますと、その間が六六七年から六六九年という辺りで高安城が考えられるということです。ただ、お城の広さは、大野城と基肄城では四倍くらい面積が違いますし、鞠智城の場合も先ほど話がありましたが内城で考えるのか、さらに大きい外城で考えるのかによって面積が違ってきますから、そういうものについては一年半とか二年というわけにはいかないと思います。高安城などは復元されておりますのは非常に小さいもので、そういうもので見ますとだいたい三年くらい。ところがもう一つ引っ掛かりましたのは六九八年のところを見ますと、高安城を修理して「天智天皇五年築城也」という註記が出てきます。そうしますと先ほどは六六七年、天智天皇六年になるのですがここからはじまると出ていたのですが、後のところを見ますと天智天皇の五年の築城也というと高安城はもう一年かかっていた。もし五年ならもう一年前からあった。そうしますと六六七年の記事というのは、高安城、屋嶋城、金田城と出るのですがこれらをすべて一年繰り上げるのか、あるいは高安城だけが天智五年からとりかかっていても、たまたま『日本書紀』に書く時に一年違いなので一緒にしてしまって高安、屋嶋、金田と並べたのではないか。金田城などについては六六七年であってもいいのかというような疑問が若干出てまいります。そういうところで三年くらい見込んだ方がいいのかと。それからお城の記事全体を見ていただきますと、大きく築城期とそれから修理期と停滞期、廃止する時期というのがありますね。これは六九九年には高安城のことが出てまいりますから、六六四年水城からはじめて六七〇年くらい

までが築城期であろうと。そうしますとここに出てきました山城は六七〇年ごろには、ほぼ最初の築城が出来あがっていたとみていいだろう。それから六七〇年から七〇〇年までの間がお城の修理時期に入るのであります。そうして七〇〇年代になりますと、七〇一年には大宝律令ができますが、七〇〇年以降が停廃期とか変質期、お城の性格が変わってくる時期ですね。そこでお城を停止する時期、それからなかには残って鞠智城のように変質していくもの。大野城もそうだと思いますがそういうような時期区分は、文献史料からずっと並べていきますと以上のような三つの画期が考えられますね。そういうことを踏まえながら整理をしてみたのであります。そうしますと大野城にしましても一番大きいものですが、鞠智城にしましても五、六年みておけばいいのではないかというようなことです。小さいお城になると二、三年くらいで出来てあがるのではないかというのがこれらの文献史料からあらかた見通せるところであります。

次に時間の関係上大宰府都城の話を先にいたします。

二、大宰府都城と鞠智城

大宰府では大宰府都城というものをまず最初に造った。これは平和外交になりましたら大宰府は「遠の朝廷（とおのみかど）」ですから最初に外国の使臣たちはまず大宰府に来ます。そういうところでは中国の唐にしても朝鮮の新羅などにしましても都城制というものが出来あがっている、あるいは造りつつあるという段階ですから、日本でもやはり大宰府都城というものをきちんと造ってそれらに対応することを考える必要が出てくるわけですね。そういうことを考えますと、大宰府都城というものは発掘調査では一期の七世紀代、つづく八世紀に大宝令ができる時期から以後が大宰府の第二期の礎石立ちで瓦葺の、現在残っているような都城の

配置が出来上がります。それ以前の七世紀の段階ではまずこの六六三年に白村江で負けてから、その翌年から大宰府に移転してきてそういう施設造りがはじまります。実際に西暦二〇〇〇年頃までの大宰府政庁などの発掘結果によりますと、七世紀の時期は大きく第一期ですが、そのなかで古い段階と新しい段階に分けられるということが知られてまいりました。古い段階はだいたい先ほども言いました鞠智城の第Ⅰ期ですね。古い段階は鞠智城の第Ⅰ期の前半部分です。七世紀の第3四半期くらい。それから新しい段階というのは七世紀の第4四半期くらいに相当するということがほぼ対照できるところです。その中でⅠ期からⅡ期へと変わっていく段階で、現在の政庁の建物と方向を一緒にした、その真下に方向を同一にした建物が出てくるという時期ですから、七世紀の第4四半期には現在の大宰府政庁の原点になるようなものがそろそろ出てきているという時期になります。また七世紀の第Ⅰ期後半で非常に重要なのは六八九年、第Ⅳ期の後半になりますが飛鳥浄御原令が出されます。この年には六月に飛鳥浄御原令ができますが、同じ九月には「位記」。位記というのは官位授与の辞令です。役人への官位の辞令書を発給するのですね。それを伝える使者が大宰府にやってまいります。そして同じ年に今度は「新城」、新しい城を監察させたという記事が出てきます。少し遅れて同じような記事が藤原京にも出てまいりまして、この新城を監察するというのは、いわゆる都城の完備した姿、中でも条坊制（じょうほうせい）をきちんと設置した、碁盤目状の条坊制ができあがる。そういうものが都城の必須条件になりますから、そういうことのための実地調査といいますか、現地調査、そういうことがやられたということになります。そうしますとこの浄御原律令の出た年にまず都城の、今の大宰府の条坊制の計画がこの段階から考えられていた。実際に現在発掘されて出てきた大宰府条坊の痕跡、八世紀の前半には大宰府の都城制ができていたであろうということが発掘調査などを通じていわれています。そして都城制ですから

さらにその後ろには大野城を造る。そしてこの中でこれは阿部さんが指摘されたのですが、資料篇二九頁にもありますが羅城にも似たような構成が考えられました。私は厳密な羅城説には反対です。東側の方が塞がってない。開け放しになっています。天然の山の地形を利用し北には大野城、大宰府政庁などがありますし、南は今の大宰府政庁から八キロほどのところに基肄城ができていますね。こういうような状況、ぐるりを囲うわけですね。王宮のまわりを山や人工施設で囲っていくというのは、既に百済の扶余の王宮で同じ事をやっているところです。そのような構想で出来上がる。そうするとだいたいⅠ期の中、七世紀の中で二つの時期に分け、さらにまた二つに分けるという考え方をしましたけれど、一方では、藤原京の遷都は六九四年ですから、当然、その後のこれに続くくらいの時期には大宰府都城制の実施ということもはじまってくるのではないか。そして七〇一年の大宝令が出てまいりますと、ここできちんと大宰府の官制も完備しますから、この段階で名実ともに大宰府の都城制、それから官僚制度というものが完備したというように考えていいのではないか。そういう背景の中で鞠智城が出来たのはいつかというと、これは大宰府都城の形成ということとも非常に関わってくるところで、そういうところから六六七年説という考え方がいいのではなかろうかということを提起したのであります。

三、鞠智城の構造

城門について

次に、時間がだいぶ過ぎておりますので二の鞠智城の構造のうち城門と古瓦について、少し話をいたします。城門につきましては資料篇三五頁から三七頁まで資料を出しておきましたが、この中で一番古い段階の

ものは、ここにも出しておきましたように礎石の上に柱を立てるのではなくて、門の両端の礎石の外側に円形のくり込みがありましてそこに掘立柱を寄せて立てる構造です。掘立柱を立ててそれに礎石を寄せつけていくというものです。そしてその間に敷石を並べるという唐居敷（からいじき）という名称で呼んでいます構造のものが出てまいります。三七頁の方には現在唐居敷構造が確かめられた鞠智城の堀切門ですね。これは木野神社の上がり口のところにありました小さい礎石と、これは併せて一つになります。すなわち一石の両端をくり込んだ唐居敷式の門が堀切門になります。そういうようなものが七世紀で出てまいりまして、八世紀になりますと門礎の上に円形のくり込みを作りその上に柱を立てるという普通の礎石立ちの門になる。そこらが大宰府の一期と二期の大きな違いになるわけですが、そういう状況が出てまいります。そこで現在両方の門の扉の柱、扉の回転軸の穴がありますが、その芯から芯、両方の中心距離をとったものを下の表にまとめておきました。これで見ますと、右端に門の左右のランクを作ったところA・B・C、三つのランクができます。まずAは両開きの扉の間隔が四メートル以上、それからBが三メートル以上、Cが二メートル以上と三つのランクが設定できます。それをまた次に礎石立ちになっても両方の芯から芯はあまり変わらないという結果がでます。それは三六頁の原口城門の場合を見てもらいますと、この図面の左側の大きな穴が掘立柱、たぶんこれが唐居敷の最初の門ですね。それから少し右側に動かしたところに礎石が二つ並んでいますが、これが次の八世紀以後にできた城門になりまして、そこで大きく門の扉、両脇の寸法が変わるということはあまり無いのですから、後に礎石立ちになった時の寸法というのもある程度参考にはなります。このように見ますとA・B・C全部揃っているのはやはり大宰府でして、これは大野城の場合、最近の集中豪雨で発見されたものを加えまして九か所の門が発見されました。それが三一頁の地図でございますが、一、二、三、四、五と出

てまいりましたが、そのうちの上の左側の新発見城門九と書いてあります。これにクロガ子岩という名前の付いた、江戸時代の絵図が残っておりまして、それに拠りますとここがクロガネ城門（現名称）という新たに発見された九番目の城門であります。この状況でいくとこれで完了するのか、あるいはさらに新しい門が出るのかわかりませんが、ここで見ましても唐居敷の掘立柱の門が七世紀で、八世紀になります礎石立ちの門になります。礎石立ちの門で当時の創建瓦に使われたものは鴻臚館式と言っておりますが、三四頁の水城のところで上の方に第一段階と第二段階と書いたところの真ん中に六三五と二二三の組み合わせがございます。これが鴻臚館式といわれる、鴻臚館でたくさん出てくる瓦ですね。この鴻臚館式と言っている軒瓦が水城の西門、それから大野城の太宰府口城門から出てまいります。そうしますとこれは八世紀の一〇年くらいが上限になるということがわかっておりますから、その辺から一〇年代から二〇年代だろうと思いますが、新たに礎石立ち、瓦葺の門が出来たということがわかってきたのであります。さらに幸い鞠智城の堀切門につきましてはうまいこと断ち割りましたので三七頁に出てきますような掘立柱の断面が残っていました。そういうことで新たに鞠智城温故創生館の人たちにもう一度礎石の実測をやり直してもらいました。その上で正確な寸法を出していただいたのがこの表に出てきます堀切門の寸法であります。そうしますとやはり大野城というのはずば抜けていまして、それぞれの大きさの違いというのがお城の機能上どうなるのか、どこに通じるものなのか、それらがこれからの課題となってまいります。鞠智城につきましても同じような問題がこれからの課題になってまいります。

古瓦

つづいて瓦の話を少しいたします。これは三三から三四、三五に瓦を出しておきました。結論から申しますと三三頁が大野城の主城原（しゅじょうがはら）という頂上にある長手の建物。これは管理棟ですね。先ほど鞠智城でも管理棟のような長い建物があると申しましたが、これも大野城の北よりに主城原という、いわゆる主城司がおったところだと思います。そういうところから発見されたこういう瓦がございます。さらにこの系譜を受けたものが次の三九頁に出てまいります鞠智城の瓦ですね。これは中央の蓮子の数とか、それから弁と弁の間に一本のしきりの線が入りますが、これが鞠智城では途中で省略されて切れております。大野城のものは中央まで通っております。そういうようなところの瓦の特徴からしますと、大野城のものを基本にして鞠智城のものが出来あがっているということになりまして、その辺も六六五年と六六七年という二年の差を大野城と鞠智城で考えたのですが、その辺にも都合のいい話になってくるところです。さらにその元はといいますとこれは四〇頁に出しました近畿の瓦。これは一番上にA類、B類と出していますが、いずれも高句麗系として近畿では処理しております。この弁間（べんかん）に珠紋が一つずつ入っているA類というのがありますね。この弁の間に珠点が入るというのが高句麗瓦の特徴です。そしてやがて弁が開いて、B類、これはもう百済化していると思いますがこれも単弁ですね。これは基肄城などと近いのですがまだ弁の長さが長い。それから弁間に楔形の界線が入るのですが、これが少し入る。これが珠紋形式と楔形の形式との変化ということになるのですね。この辺のB類というのは近畿の方でも石田（茂作）先生とか藤沢（一夫）先生の段階から高句麗系とか高句麗系百済という名称で呼んでいたところです。鞠智城、大野城、さらに鞠智城などを見てみますとこの中房という瓦の真ん中の円形の部分、円盤になっているところですね、そこにみられる蓮子の数がかなり

多いのですが、この円盤形の中房は、九州の百済瓦に出てくる特徴でして、従ってこういうものについて、高句麗系百済というような系譜観を考えてよろしいかと思います。

四、大宰府都城と鞠智城・補遺

最後に大野城と鞠智城の相対的な比較をしてみますと、鞠智城では大きくⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ期、Ⅴ期と分けましたが、これを大野城の方に持ってまいりますと、大宰府に持ってまいりますと、この七世紀の段階のⅠ期とⅡ期はⅠ期の古段階、Ⅰ期の新段階といったものにほぼ相当していくということですね。それから鞠智城の第Ⅲ期といっていますのが八世紀の第1四半期です。この辺からが大宰府政庁の第二期にあたります。そして大宰府の場合はまだ鞠智城ほど各時期について細かい調査がされておりませんので、将来調査をやればその辺のところの対応がもっと出てくると思います。その中で第Ⅲ期というのは鞠智城では一つの停滞期といわれておりまして建物の数も少ないし遺物も少ないという時期です。そういう停滞期という時期がありますが、この時期は八世紀に入りました時期から九世紀にかけて第Ⅳ期ですか、この辺にかけてが大宰府の整備では第二期といわれているものですね。しかしこの辺が細かい調査、例えば土塁の断ち割りとかそういうものもごく一部しかやっておりません。それから現在進行中の大宰府官衙の整理などが進んでくれば、この辺はあるいはもう一期分けられるとは思います。まだその辺がはっきりしていないわけです。実際には九四一年、一〇世紀になりますが、鞠智城で第Ⅴ期になるところです。一〇世紀の九四一年になりますと藤原純友という、瀬戸内海を荒らした海賊がおりますね。それが襲来して来て大宰府の政庁全体を焼き討ちして完全に焼いてしまったのですね。発掘調査をしますと現在皆さんが現地に行って見ている礎石の状況

というのは、この純友の乱以後に、復元された状態を見ているのです。そこから以後を第三期と現在大宰府では呼んでいるのです。このように見ていきますと大宰府の変遷は鞠智城にしても大野城にしても大宰府政庁との関わりが非常に強いところでありますから、当然だと思いますが、多少のずれはあってもほぼ大宰府都城の変遷とかなり照合できることがわかってきたというところが、本日の私の話のしめくくりになるところでございます。

時間がまいりましたのでこれで終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。